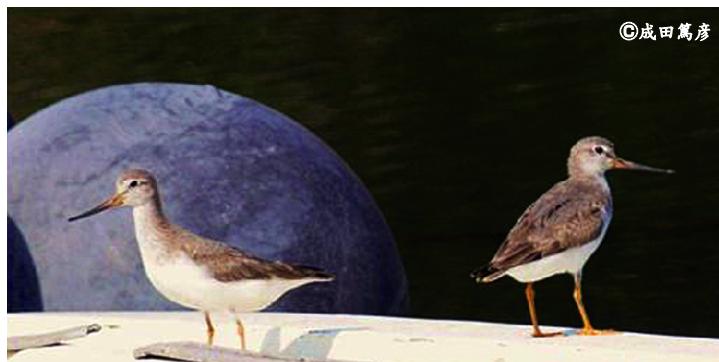


かずさの博物誌

ソリハシシギ

～上総の海岸で羽を休める～

文・写真／成田篤彦



▲ソリハシシギ

全長約23cm。旅鳥。繁殖地はユーラシア大陸の針葉樹林帯の川辺など。冬季に南に渡る。2010年10月3日 木更津市畔戸＝成田篤彦撮影



▲飛ぶソリハシシギ

2010年10月3日 木更津市金田＝成田篤彦撮影

（参考文献）
千葉県の自然誌本編7、桑原和之外
000『東京湾の鳥類』たけしま出版 2

©成田篤彦

「潮が満ちてきたので、この辺で終わりにしましょう」と幹事さん。秋の干潟での野鳥観察会はお昼で無事終了。

押し寄せた海水をじやぶじやぶさせて「夏は暑かったですね。やつとさわやかでいい日にになりましたね」と話しながら、戻ってきた。

「いつも気になつてているのですが、さつきまで干潟にいた鳥たちは潮が満ちるとどこにいくのでしょうか?」と聞くと「海の杭や人の来ない海岸で休んでいます」と熟年の方が教えてくれた。

「時間があるし、天気もいい。少しあたりの海岸を探してみようか」と車を走らせた。

船着き場の水路を観察していると「ピヨー、ピヨー」と口笛を鋭く吹いたような鳴き声がした。二羽のム

クドリ大のシギが水面上をかすめるように飛んで行った。

「イソシギか?」と後を追う。するとひっくり返った廃船の船底の上に「羽で止まつた。

そつと桜の幹の陰から覗きこむとくちばしの先が反り返っている。

「あ!ソリハシシギ。こんなに間近で」とびっくりした。絶好のチャンス。わくわくしながら、背を低くしてぶれないよう幹に体とレンズを密着してシャッターを切つた。あ

いにく、バツクが白い岸壁と真っ黒な浮き玉。「うまく撮れているといいのだが?」と絞りを変えて何枚か撮影した。しかし、体を動かした瞬間に、上流へ飛び、流木に止まつた。そのうち、腹ばいになつて眼を閉じた。

「暖かいひざしと温まつた流木の上でいい気分なのだろうな」と思った。

さて、さらには海岸線に沿つて探し続けると、たくさんの杭が沖に向かって打ち込まれている海岸に幅五十メートルの腐りかかったアオサなどのがれ物が散らばつていて、そこには海藻が絨毯を敷いたように流れ着いていた。ペットボトルや発泡スチロールなども流れ着いている。そこにはチュウシャクシギ、キアシンギ、ハクセキレイなどが盛んに海藻の中にくちばしを差し込んでいた。岸壁から海辺をそつと見ると「ピヨー」と鳴きながら数羽のソリハシシギが沖へ飛び去つた。

ソリハシシギはユーラシア大陸の北部で繁殖し、アフリカや南アジア、オーストラリアなどの沿岸で越冬する。上総では春は五月、秋は七月下旬から一〇月頃に見られる。盤洲の海岸一帯では一九九七年九月一六日五五羽などの記録がある。ちなみに環境庁自然保護局野生生物課（一九九七年「シギ・チドリ類渡来湿地目録」）によれば、日本に渡来する推定最少個体数は三万六千羽だそうだ。

秋はシギ・チドリたちの渡りの季節。上総の海岸は彼らの移動途中の羽を休めるオアシスである。えさを十分にとり、体力をつけて旅を続けてほしいものである。



▲流木で休息するソリハシシギ
2010年10月3日 木更津市畔戸＝成田篤彦撮影

な浮き玉。「うまく撮れているといいのだが?」と絞りを変えて何枚か撮影した。しかし、体を動かした瞬間に、上流へ飛び、流木に止まつた。そのうち、腹ばいになつて眼を閉じた。

「あ!残念」と思いつつ他の鳥を撮っているうちに再び「ピュー」と鳴きながら、ソリハシシギが舞い戻ってきた。そして、海藻の中を探るように斜めにくちばしを盛んに差しこみ、小さなカニを挟んで呑み込んだ。



▲カニを食べるソリハシシギ
2010年10月3日 木更津市金田＝成田篤彦撮影